
空に消えた隊長

栗原峰幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空に消えた隊長

【コード】

N6000I

【作者名】

栗原峰幸

【あらすじ】

終戦間際、隼を駆る私の腕前は未熟だった。そして終戦。加藤隊長は男としてけじめと責任を果たす。

その時、私たちは隼に乗って我々の補給基地上空に現れたスピットファイアの編隊を迎撃していた。

当時、17歳だった私は陸軍航空隊の少年兵として最前線へ駆り出されていた。腕は未熟だった。同期の中でも一番覚えが悪かっただろう。普通に操縦するのがやっとのことで、とても敵の弾をかわしたり、攻撃したりなど出来たものではなかった。

そんな私でも飛ばないわけにはいかなかった。言い訳など通用しない。それが戦争だった。

そんな私に加藤隊長は、

「笹山、お前は飛ぶだけでいい。敵が来たら逃げる。決して弾を交えるな」

と言った。

隊長の隼が敵の隊長機の正面に回り込んだのが見えた。そしてお互いすれ違いざまに撃ち合うが、なかなか命中しない。

隊長は尚も敵の隊長機の正面に回り込もうとする。隊長は決して後ろからは撃たなかった。敵の隊長機も隊長を後ろから撃つことはなかった。そして、またすれ違いながら撃ち合う。

隊長たち以外も敵味方入り乱れての大混戦となっていた。

隊長の隼の主翼に穴が開いた。幸い火は吹いていない。敵の隊長機も胴体に風穴が開いている。

その時、私の照準器の中に一機のスピットファイアが入った。私は夢中で機関砲の発射ボタンを押した。しかし、スピットファイアは私の撃った弾をヒラリとかわし、私の背後に回った。

「しまった！ やられる！」

私は一瞬、心臓が止まる思いがした。しかし、なぜかスピットファイアは攻撃をしてこなかった。

幸い我々の編隊は死者を出すことなく、補給基地に帰還した。隊

長の隼も火こそ吹いたものの無事だった。

私は帰還してすぐ、加藤隊長に呼び付けられた。

「笹山二等兵、入ります」

「この大馬鹿者！」

ドアをノックし、部屋に入った私を隊長はいきなり怒鳴りつけた。
「どうして撃つたんだ。あれほど撃つなと言っただろう！」

「は、照準器の中に敵機が入りましたもので……」

「確かに我々の隼は早さの点では敵のスピットファイアより勝る。

しかし、それは腕があつてこそだ。お前のような未熟者にはまだ早

い

「……」

私には返す言葉がなかった。

「今日の敵の編隊は手ごわい奴らだった。隊長の指揮が見事にとれている。だから貴様を撃たなかったのだ」

私には隊長の言葉の意味が理解出来なかった。だから素直に聞き返した。

「何故でありますか？」

「あいつらは本当の男だ。礼儀をわきまえた本当の勇者だ。だからヒヨコの貴様に喧嘩を売らなかつたのだ」

私は開いた口が塞がらなかつた。こんな戦場で騎士道を重んじて戦争をしている者がいるとは思えなかつた。

隊長は天井を見上げて言った。

「俺には敵の気持ちが悪くわかる。あいつらは必ずまた戻ってくる。その時が決着をつける時だ。今まで俺は友軍を守るために卑怯とも取れる戦いをしてきた。だが、あいつらとは正々堂々と戦いたい」
そんな隊長の目が熱く燃えていた。隊長は拳を強く握り締めた。

私はその夜、寝苦しくてなかなか寝付けなかつた。そして隊長の言葉を思い出していた。

(隊長は一体、何のために戦っているんだろう?)
そんな疑問が私の胸に渦巻いた。隊長の気持ちを理解するには、
まだ私は若すぎたのかもしれない。

翌朝、昨日空戦を交えたスピットファイアの編隊が再び我々の補
給基地の頭上に現れた。

スピットファイアは我々が飛ぶのを待っているかのように旋回を
繰り返した。決して基地には攻撃をしてくれなかった。

「よし、迎撃だ。皆、上がるぞ」
隊長が叫んだ。

「いいか。隊長機は俺が相手をする。他の者は手出しをするな。そ
れから笹山、貴様はなるべく離れて我々の戦いを目に焼き付けてお
け」

私は素直に隊長の指示に従うことにした。

エンジンが一齐に爆音を立て、エナジーシャが回される。プロペラ
が旋回を始めた。

我々の隼は滑走路を滑り、大空へ舞い上がった。

私は一番最後尾を少し離れて編隊の後を追った。

敵と味方が入り乱れて撃ち合いを始める。上下に円を描く機体も
あれば、左右に旋回する機体もある。

私はお互いの隊長機に目をやった。昨日と同じように、双方正面
からの勝負を挑んでいる。

3度目にすれ違った時だった。敵の隊長機が火を吹いた。それは
大きな爆発となって機体を空中分解させた。そして残骸が密林に墜
ちていく。

パラシュートは見えなかった。おそらく敵の隊長は脱出する暇も
なく爆発に巻き込まれたか、隊長の隼の機関砲の餌食になって既に
死亡していたのだろう。

昨日の隊長の話聞いていただけに、私は複雑な思いで墜ちてい
く火だるまの残骸を見つめていた。

他のスピットファイアは隊長機が撃墜されたからだろうか、空戦をやめ、引き返して行った。味方の数機がそれを追おうとした時、隊長の無線が入った。
「やめる。追うな」

我々は整備の悪い滑走路に降り、補給基地へと戻った。
隊長が隼のコクピットから降りてきた。その顔はどこか浮かない。と言うより悲痛な面持ちだった。

隊員たちはこぞって、

「隊長、やりましたね。見事です」

「これで畜生が1匹片付いたってわけだ」

「今度また来てみる、全機撃ち落としてやる」
などと言っている。

その時、隊長の目が大きく見開いたかと思うと、あらん限りの声で怒鳴った。

「貴様ら、やめろ！」

一瞬、辺りは凍りついたように静まり返った。

「あの隊長は真の男だ。勇者だ。そして俺の友だ。その魂を穢す者は俺が許さん！」

隊長はそう言い放つと、部屋へ入って行ってしまった。

その夜、私は隊長の部屋に呼ばれた。

「笹山二等兵、入ります」

「ああ、入れ……」

部屋では隊長が椅子に腰掛け、ボンヤリとしていた。いつも精悍な隊長らしからぬ姿に、私は少しばかり衝撃を覚えた。

「まあ、座れよ」

立ち尽くしている私に隊長は、机に配された椅子に座るよう勧めた。私は遠慮がちに座った。考えてみれば、隊長とこうして問い面で座るなど初めてだったかもしれない。隊長は虚ろな目をしながら、

ペーパーナイフを指先で弄んでいる。

「なあ、笹山……」

「はい」

「この戦争で敵、味方含めて、どれだけの人間が死んでいくんだらうな？」

「自分にはわかりません……」

正直、私にはわからなかった。考えてみたこともなかった。

「普通に人を殺せば人殺しだ。殺人だ。それが戦争だから許されるというのは、どうも道理に合わん気がせんか？」

隊長の口からこんな言葉が出るなんて意外だった。隊長と言えば、この陸軍航空隊の歴戦の勇者だ。少なくとも私はそう思っていた。

「戦争なんだから、仕方……ありませんよね」

私の言葉が答えになっていないのはわかっていた。しかし、他に適当な言葉が見つからなかったのも事実だった。

「そうか……。仕方がないか……。俺にはな、今日撃ち落とされた敵の隊長が友達に思えるんだ。こんな戦争なぞなかったら、きつといい友達になれただろうってな。それにあいつの姿の中に自分を見つけたんだ。そんな友達でもあり、自分でもあるあいつを俺は撃ち落として殺してしまった。わかるか、この気持ちか？」

隊長は目に涙を溜めていた。屈強な男が目に涙を溜めていたのだ。友を想う涙だろうか。それとも自分を撃ってしまった後悔だろうか。おそらく、その両方だろう。

「なあ、笹山。もうすぐ、この馬鹿げた戦争は終わる。俺にはわかる。日本の戦況は非常に不利だ。司令部の極秘入電を聞いた。広島に原子爆弾が投下されたそうだ。もう、日本はおしまいだ。日本の負けだ。笹山、貴様は堂々と日本へ帰れ。貴様は一人も殺しちゃいない。綺麗な血のまま日本へ帰れ。俺は貴様に敵を撃たせなかったことを今では誇りに思うぞ」

「戦争が終わったら、隊長はどうされるのですか？」

「俺か？俺の体はどす黒い血で汚れてしまった。多くの敵を殺し

た。戦争だからと言って許されはしまい。俺は責任を取る」

その言葉に私はドキリとした。

「隊長、まさか自殺なさる気じあ……」

「ふふふ、それは貴様が心配することじゃない」

隊長が私の方へ向き直り、微笑んだ。そして隊長の顔が真剣になった。

「笹山、これからの日本という大きな船を動かすのは、貴様たち若者だ。未来を、よろしく頼んだぞ」

隊長が私の手を固く握った。私も強く握り返した。

隊長の言った通り、程なくして日本は敗戦を迎えた。私はというと、正直安堵に胸をなでおろした。

その日、我々が隼に載って引き揚げるのは正午の予定だった。もう、この隼も今日を最後に永久に飛ぶことはないだろう。洋上に浮かぶ空母に主脚をついた時、その心臓の鼓動は止まるのだ。

隊長は朝早くから隼の整備に余念がなかった。最後の飛行と言っても僅かな距離だ。入念な整備など必要なかった。それでも隊長は油まみれになりながら、せっせと整備をしていた。

我々が宿舎で飛行までのひとときを休んで過ごしていた時、滑走路から隼のエンジンの轟音が聞こえた。

皆は何事かと一斉に滑走路へ飛び出した。

すると隊長の隼が今まさに飛び立たんとしているではないか。

「おい、どうした！ 何考えてるんだ！」

整備班長の声が響いた。だがそれは轟音にかき消されて隊長の耳には届いていなかっただろう。

私は隊長と目が合った。いや、隊長が私を見たのだろう。その目は、

「俺は責任を果たし、友のところへ行く」と語っていた。

隊長機はゆっくりと滑走路を滑り出した。そして大空へと舞い上

がると、左に大きく旋回し、やがて一つの点になり、見えなくなつた。

その後、隊長や隼が発見されたという話は聞かない。隼は主に陸軍に配備された戦闘機で航続距離は短い。隊長の隼がいつまでも飛んでいられるとは考えられなかった。

隊長は信念に殉じ、その魂は大空を駆けているのだと思った。

そして昭和60年。

私は妻とともに初の海外旅行に出掛けた。時代はプロペラ機からジェット機の時代へと変わり、快適な旅を約束してくれた。

眼下にジャングルに覆われた滑走路が見えた。かつて私が配属された補給基地だ。なつかしい思いで私は滑走路を見つめた。しかし、すぐに分厚い雲が機体の下を覆い、滑走路は見えなくなってしまうた。

仕方なく私は雲の上に目を移す。そこで私は信じられない光景を目にした。

「隼だ。隊長の隼だ！」

私は窓に顔を張り付けた。

「なーに？ 大声出さないでよ」

横で眠っていた妻が不機嫌そうな声を出し、借り物のブランケットに顔を埋めた。

隼はしばらく平行に飛ぶと、離脱し、雲の彼方に消えていった。

(隊長……)

私の双眼から熱いものが溢れた。そして敬礼をした。軍人ではない、真の男に敬意を表する敬礼を。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6000i/>

空に消えた隊長

2010年10月8日15時09分発行